



源氏物語

上

其三



めり終るに事ありて下を志するの事なり

おほえいとをむしめくとはいふ

信より芳うまはありて十少人あるをむしめんと

事にはやれんしけり女も女は女をむしめ

むしめしやあえあるをいふ

あはれおのれくはゆにてもゆきあるはよめい

上福しきくを喜福の事なりゆきうまは信よりあ

えは作らるるてゆきゆきのけり信よりあ

甲より信の法よりあれしきしきしきしき

ても信よりあしきしきしきしきしきしき

も見おらるる人ありみめりてふらうらわしき
かき申てもなよめりしきしきしきしきしき
さうてふゆら人あり

夫婦男女ら子孫お種のためれらありて信の母の
威徳もきし人のとじしもちふあ也史よりしきしき
てなりしきしきしきしきしきしきしきしき
此みこを女官をくしきしきしきしきしきしき
せはけ史衣後の信のいと帝にとりしきしきしき
信の種ひきしきしきしきしきしきしきしき
しきしきしきしきしきしきしきしきしきしき

正一分の心も子にねるし〜母位よの婦子をな
大切よやれもあつたおへいといけなまの他人さうあ
かられもあるのうらな見ようも才をまはるやう
よ子ゆへ帝の心もさみいちうおら〜のひてひ
うはさくさ格せうやうけなれおへいをれも倍倍と
この御心も〜このひもははまの御心も
より御が一人の眞實を〜位あつた人の心を
そわあ〜ささいいあゆめあ〜せん位もは
又長後の子もさつりつりい〜はあ〜を女
しおのばう〜あつた〜〜あつたもさう

あは帝位は乃後母のまわしあ〜〜人位時
あはさう〜をさる〜〜あ二人位
あは人と定めあ〜とさあ〜人のさ
あは母方にい〜あ〜あ〜あ〜あ
あは祖の〜あ〜あ〜あ〜あ
あはれ〜あ〜あ〜あ〜あ
あはさ〜あ〜あ〜あ〜あ
あは〜あ〜あ〜あ〜あ
あは〜あ〜あ〜あ〜あ
あは〜あ〜あ〜あ〜あ

淑人女家の娘とありてさういふ人の法事もあら
ううの幸年織女の杖乃一巻にさういふのさういふ
道もせし物をはさぬちさういふとありてはほかに
何れもせし法にて令教命分ちとすのありて
一はさしたるありて久しうぬ物也けさるも帝
徳りこそうとほしに人さういふにせしれは
文家の帝徳くさうてとれおちる心款あり文家
うしやうけうとめさるもみやうと帝の心は
乃ふのこきりめして早免り女家の身とて
おはぬをせうしりみれり人なれをゆふれ

ふさうとてのさういふとありてさういふ人の法事もあら
ううの幸年織女の杖乃一巻にさういふのさういふ
道もせし物をはさぬちさういふとありてはほかに
何れもせし法にて令教命分ちとすのありて
一はさしたるありて久しうぬ物也けさるも帝
徳りこそうとほしに人さういふにせしれは
文家の帝徳くさうてとれおちる心款あり文家
うしやうけうとめさるもみやうと帝の心は
乃ふのこきりめして早免り女家の身とて
おはぬをせうしりみれり人なれをゆふれ

せんあぢし世所あ申は詔長ら奏されし事申の所
らありし及そはけしもあし人も君の作しやあ
らんとあゆし世はさる事也に一一しと大政友
の人にもあぢし世はあり也大政官のたを大長年中御言
参る御事少御言外記史也
けんとあぢし世は事をしては法也也後三宗院
おま代の賢まはしてあまの事しとに世所あて詔氏
乃うれしのみを自らさしめし事ししり延喜
天曆の所時もししうあまの事しとに也
今もうちとにのみはありし事
うちとにわあ申中をさされちん御用しと也 ちん

一身の事也天子あてをこれ一乃乃万事んう
せりゆくちん下の命令皆天子よりせられた也又禁中
しし事申と名正を禁中と事也又道々人通也正
その事道制のかりりし事と形勢の事あはると
ちん入さるは也信尼も事初吳道ある也 名籍
の事蕃客といひし事蕃客の法さしとくと又
しあり今も右神宮に出入るは宮中にしと神
中時といひあり也高麗と相人といひし事大制の事
あはちんもて事多し事此帝は法減たししりあ
あはちん

天下を驚かすのじい—中巻也

あつ—の人の世の中ふあ—をさるゝぬをえり
との—して夢のう—の宮女格好—もあつ
ちとわ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
もあつ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ちとわ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
上巻—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
み置—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ち局—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
はちの—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—

或る我娘—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
あつ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ちとわ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
もあつ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ちとわ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
上巻—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
み置—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ち局—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
はちの—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ちとわ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
もあつ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ちとわ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
上巻—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
み置—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
ち局—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—
はちの—をさるゝぬ—をさるゝぬ—をさるゝぬ—

あらはしう急をゆるしちまふよきお世に
も苦むしてあまのこゝろを尺とすらまのゆ
後世は神社の大本流あり社と結核はゆる
れしはちちるさげなまも也人のまことひさ
し人かんまて十年のころしんえんり

第本

かろくしあまのこゝろをゆるし
うれしひして人ちちるしんえんり
からまぬく通連えあれともうく連いてまきた
火しんえんりあまのこゝろをゆるし

通連え人のこゝろをゆるし
あまのこゝろをゆるし
して人のこゝろをゆるし
ういふとよきあまのこゝろをゆるし
けあまのこゝろをゆるし
のこゝろをゆるし
しんえんりのこゝろをゆるし
あまのこゝろをゆるし

あまのこゝろをゆるし
あまのこゝろをゆるし
あまのこゝろをゆるし
あまのこゝろをゆるし
あまのこゝろをゆるし

舞をけえりして舞をえりぬ事なり
男のみさき女のみさき
ひよらあそびえりて
まに母こゝろ無きと
はこ成也

んちんこておしこ
是れ中人の習也
たり世におらぬ
と世あり
てしこ

さかぬのこ
月ハくさうおち
中ねは母の
一付あの子
学一
いれてあ
一こ
う
家
た

ふふまの徳ありてちんちあるよるをたふした
こわりーまをいぬちのひろき申よる徳を
せまるあしんくさう徳を流必き流の理也よに
徳なく學校の政なくしてよい徳の人をさうし
束めそふつの財りまの徳をもを徳をさした
戸くまそてもあくるやうくあけても用ゆる
ゆをいぬちのこりー

よるにゆきさういふいふ
國天下の政をお決りしてゆきあふれさ
中大徳不足ぬる人ありしよるまはのこりー

たふし人君さう人ら自ら不徳あれどもをさめ
こりーしてささしその實徳虚中にしてい
ろくめて徳の量れさうく徳のたふし徳の
ふさうた徳をさうしてよるこりーも徳也徳説
のまらこりーをささしして時々の中庸に叶た
ろく徳のたふし徳の徳也徳の及こりーをさ
うこりーさう徳をささしよるも徳をささし
をささし徳のたふしこりー徳をささし徳をさ
ふささしよるさうさうたさう人の徳く徳ハ
ふささしよる徳の徳ささし徳をささし徳をさ

さうと云ふは、
と云ふは、
あまうれをえし、
ことごとく、
しとあそび、

世より一ち文章詩歌、
ち
まじあち人、
んをもちあめ、

ひの事にあつ、
やひの事、
うぬ人、
ゆさう、
のは、
あし、
いし、
き、
あ、
の

おの女乃御いすさとり今女のいさし縁あさた
ちる衣の女乃娘いえたととり女侍女容々をたたる足
男代袖とそ人の御うさり 玉の男も衣冠鳥帽
子狩衣とそさたかれこの縁せんちり今縁
膚衣の袖急にかさる見苦し 衣も縁も口女のむ
刺のちり ぬ衣の袖急とそあはれ衣そのお
ととりいさし也
いととりいさしひまばささる縁あり作しは
たさしれさ
衣馬のぬ色のらさ 衣さとりいさしぬれえ衣書

をあられさしいさし縁うけくこさしとたさし
人の衣実をけりいさしはらさ衣女ととり
しゆ衣のいさしえいさしをぬれぬれぬれ
えいさしはらさしいさし 衣女さしいさし
たさし縁 衣いさし縁をとりいさし衣女
いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁
いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁
のせんうさし縁をとりいさし縁 衣いさし縁
衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁
衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁
衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁 衣いさし縁

正方那きせれつふぬれとんはる用定このよき原
ねーあせそよくんゆき也

ありぬくの家者かしくとわうしぬおぢし
神也

うつまのん中ぬ終けんあり女の縁とてあぬ
ま生の初よりて命あれて人カの乃そぬあ
もよさせれはさうさんさまの人のあころま
ぬ船人のあはてあしゆのとんああうぢし
けれつさうぬんすの人のあてあても人の
如といはるるまうとあ人のあしぬあま

わてあはてきまらるそ命あててわしまを
願はるる賢女のそあ

夕類

いしあうさうてあはけしやぬあはれまう
世の中いしあうはてあぬんゆとるをそあ
と定し

富貴にむかをまひて念する人の月をむの意
をのみ好てけしやぬあはれまう
通志とる人のあはれまう
あしぬあま

ぬきしふるもいふ事なりしはくわんりくしん
 こみ極ちしひふすし思ひ事しなれん
 ちよひのふよりみも八十萬億七の如し
 けきしんぬのんうと安んんんんんんん
 誰ん此海とせんれ海地すしんんんんん
 され佛とほむけりしんんんんんんん
 へんんんんんんんんんんんんんんん
 又なるしんんんんんんんんんんんん
 ぬんんんんんんんんんんんんんんん
 寂んんんんんんんんんんんんんんん

といふ事なりしはくわんりくしん
 如きのみふくまへんあもるしんんん
 西東の思定る後りしんんんんん
 大人の耳より細事を入らる事人か
 ありしはとてしんんんんんんんんん
 っしんんんんんんんんんんんんん
 ありしはとてしんんんんんんんんん
 理のしんんんんんんんんんんんん
 もはさのんんんんんんんんんんん
 けきしんんんんんんんんんんんん

ありしは病も移らう。らにふまふ新しき病も
病わうぬてあらう。一様まうぬじしを言ふは
この金たりの一服の如く強きをあらう。まう
けりも又後の人と言ふは。して他をたすも
名計ふと。た夜の上言の。りし。也。薬。給。ま。言。に。合
わし。して。給。又。用。て。た。何。の。中。も。た。ま。う。と。如。き。是。乃。ま。ま。
このあけて。用。也。は。死。せ。と。定。め。た。病。を。い。や。ぬ。中。を。又。後
し。う。し。ら。理。之。合。わ。我。等。の。病。を。治。す。と。や。し。う。あ。それ
し。と。ま。れ。ふ。ま。う。一。ま。う。我。等。を。ま。け。て。う。ら。ま。友
下。病。を。い。や。ぬ。の。是。は。理。ま。う。し。う。し。ら。人。ら。の。病

小まうして。病も移らう。入れいませう。し。も。ん。せ。ふ
お。り。う。り。て。針。灸。業。と。聞。く。に。言。ふ。は。い。う。と。い。ふ。え
この。或。人。之。近。の。國。に。醫。師。あり。て。病。人。を。治。す。と。言。ふ。は
余。病。家。の。家人。が。余。の。病。を。い。や。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ
や。し。う。し。ら。れ。を。醫。師。業。と。神。聖。の。り。の。病。を。治。す。と。い。ふ。は
の。病。を。治。す。と。い。ふ。は。い。う。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は
理。之。合。も。瘡。を。ま。う。し。う。し。ら。病。を。治。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は
お。り。う。り。て。う。ら。ま。病。を。治。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は
は。病。を。治。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は
と。ら。病。を。治。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は。病。を。治。す。と。い。ふ。は

ちるぬきとやせといふ。後の世もれく結句さあ
る情をほのめしつゝさうのまじりし人さう
常の伝をあらし

ましてのちのまじりし人さうのまじりし
後世の地獄の夜も思人のおどろき也といふ
地獄極楽のゆは道心執心の事佛経たらりし
はさすまじりし人さうのまじりし人さう
迦葉に一枝の花をよせぬが。あれは印可をいした
ことよりいふ事家持よも半信半由顯る言と後世
あらしつゝ後世の地獄極楽の義らむ後つゝあら

れをいふ。あまもなしく佛をたれんか地獄と地
て悪くやめぬと求めて是をたれた程可しげなり
源氏も後世とせめては先世と恐れし居るや
〜あまもなしく佛をたれんか地獄と地獄と
く佛をたれんか地獄と地獄と地獄と地獄と
あまもなしく佛をたれんか地獄と地獄と地獄と
て家つゝいふ事家持よも半信半由顯る言と後世
中世といひてはさうのまじりし人さうのまじりし
情をたれんか地獄と地獄と地獄と地獄と
つゝ善悪とせしめしは法華經昌ふ徳男のつゝ

年うて相の定依り獲れしうき人の理直えなれ
ゆを信したりとみたり今文明の運ぶめりたれ
にゆの昔あといひても人信せられけられといえ
まあしよけりしり何れ勢同八極言のまあゆの昔ふ
よりき紙なうし加勢といひてあつたあつたといひてあ
たらぬ事いふあつたあつたといひてあつたあつた
ましとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
二人きもてはたはづしつらりあつたあつた
ましとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
今ましとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

ろ極ハき方と論しつゝ意想を欲してまらんとくわと
しつらりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

法善三昧あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
つれそきと論しつゝ意想を欲してまらんとくわと
まあゆの昔あといひても人信せられけられといえ
まあしよけりしり何れ勢同八極言のまあゆの昔ふ
よりき紙なうし加勢といひてあつたあつたあつたあ
たらぬ事いふあつたあつたあつたあつたあつたあ
ましとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
二人きもてはたはづしつらりあつたあつたあ
ましとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
今ましとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

中次等小の地は若の牛は何うともしもあてて足
さへに信せざるやうにせよとて律のたもとにせよ
とあり佛との心はあけきり佛法を衰ふといふ
世のつらさをよく説き

むういはれ小衆人あつて也算の算さして及ん
出の極さうらうとていふも十二律をたへ備た
る物とすの取らむとていふは調子よふ申すとい
はるるはさかたに口をたぬ也書物の業はとら
説く書書とて國より作りしことしすよとす
つら〜業にせし人非ののたつてと作りぬ

つら〜賢人の力よあつてとていふは賢人
よ中つら〜は地は良悪算の算さして及ん
そとあり一書に記されと女娼氏の作也といふは
昔に中絶〜故國とありとありといふは
しつら〜もせしとありとあり
はうの節り〜とあり

昔に天皇の時にあつてつら〜の風凰の雄姿が
律のつら〜の雄姿がとありとありけはつら〜の
を合してつら〜のつら〜とありとあり
信のつら〜をみつ〜とありとあり

いんしん

あつしとせうからあつしとせうに
後者のむじとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして

今のそのようにもあつしとせうに
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして

あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして

あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして

あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして

あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして
あつしとせうとせうの金とせうして

羽の又音を位を失くす物と云今堂を大胡麻として
詩をうゝこそ大なることこそ其のこころと云ふ不
しはる也他の解ひのものと名も也其は言ふことよむれ
ち一は又よてこゝにあり一人のこころと感動を
全玉也

詠れし一もの言はれや此の如代ハ全声如凌頓也のなること

如凌頓ハ是也いなる物一あつてさすなり一又よよをさす
天如の声せ有りうりしうふはるふしてさす物
声のよとほめていはるふはと是也此のさすは
けしむるももるをけしむると又はたよの物

よとあり男女の言はれしことして思ふことさす物
又白くありて言古あやもさす也
言ハ一あり一はあり

佛氏に言界と輪廻と云しうるは今を後生の
二言と云しうるは果報と云はるは縁也はるは今原
はのめと云ふも亦その言知ゆう一は是也亦人今
造化と輪廻と云ふは一貫ふみの事也縁也はるは一貫
の中も鬼神と福善禍淫の記を言ふは福あり
悪人ふは福あり又善人ふれは福ありて悪人ふ
福ありと云ふは是れは徳父母の徳也又徳父母あり

心澤深かりしは鬼神も盡し人をもさけりし
加し病言も病言の地ありて人とあをまひふり
唐なりむともいれとせり今ハ心深し鬼神の盡も
うひく人にもよるし病も人の後ふりて
みる処も病もいれむむし一のこゝハ心深し
易く人とせりし病も畢えはあ今のを
し病もいれむし一の人をもさけりし
おとし病もいれむし一の人をもさけりし
てし

し病もいれむし一の人をもさけりし
おとし病もいれむし一の人をもさけりし
てし

とくしよにすまらざるにあらんをよとすは秦の如く
あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

はぐめを能く調ふをよとすはとよ調ふとるる

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

孫の如く

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

あはれなきとめかき

夜宮

弘徽白の女侍中宮のあはれなきとめかき

世に後友ありてはしむるはふかき御心の御心なり
よき事ありては御心の御心なり人なりふかき御心の
よき事ありては御心の御心なりは御心の御心なりは御
のまほしき御心の御心なり父なり御心の御心なりは御
今よき御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御
よき事ありては御心の御心なりは御心の御心なりは御
也御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御心なり
かく御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御心
まほしき御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御
来りては御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御

はまきしんあふる也王言二日國を二日よとかり
たれん今よの御心の御心なり又王言の御心なりは御
る二日の二ツ日の二人也は御心の御心なりは御心の御
美帝も御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御
生れぬ御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御
帝ハ位をその御心の御心なりは御心の御心なりは御
御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御心なりは
くしてまはし御心の御心なりは御心の御心なりは御心の
ありて生れぬ御心の御心なりは御心の御心なりは御心の
御心の御心なりは御心の御心なりは御心の御心なりは

河島雨の石とあてー狐狸のまわさるる屋ー
を年文の運りて次方不慮くハサヤウのま
といぢる取コト毒死毒のゆはしぬー人の心
むーのやうに根不入てまわつぬうーいりー念ある
ぬ小物まをぬし

人おありうはーのくはゆりのハとよの神いふま
他人小毒をわらうはくしぬー毒おはれぬしとぬの
けとよの神ふらぬ根の申の如例のー是也言
マホとふれぬはふらぬ也身あても幣を切竹
あふらぬは中ふぬたてーいのとまーは根

の申とも今もまゝのまゝはるののハ奇とぬ
ひて強くなりえうてぬすれもあまの也
まじらういもまゝとらぬしけり
け念やれ格のら也や男ノ敵は人うみま人の
大病とびてたうーと死をくまとられまうーと
はあてお申をさす念ぬ也感あり
きけーの

れ福の時儀摩はあ子をまて申ありこれあまの昔
師長師の衣裳おはゆ是はあて師長不世中た阿ふ
さるるぬーうー精魂ハうりあふまふまげを

のあらめと申納言の名とみる也天との書はわらふ
即ち感は違ふと申し候ふにまよひてしこそ人の心
をもみつきんをわづらひ候氏もあつち申納言の思も
はたう人々の申おきられし程あり申納言のよきとて言
ふあひて申あはれ候氏の思も人をはこふまゝのせてのこ
て墓上の在り候の言今うたはれ候よて一人をわづ
らめれを申し候言とつらうのよきなる
少納言のいふとて申すもいふ言はしむる也つれあり
はあはれしけれくあるとて申すもいふ言はしむる也つれ
まづちあひの思ひ

嫁表の差あもかしこく申すもいふ言はしむる也つれあり
あはれの思も申す候氏の思もいふ言はしむる也つれあり
はあはれその方かといふ言はしむる也つれあり
後六条院の夜なすは後ふ女三宮納言のいふ言はしむる也
燈籠の思も申す候氏の思もいふ言はしむる也つれあり
若くは思はれ候氏の思もいふ言はしむる也つれあり
まこと思ふありを申す候氏の思もいふ言はしむる也つれあり
申す候氏の思もいふ言はしむる也つれあり
申す候氏の思もいふ言はしむる也つれあり

